

シンポジウム開催の趣旨

2020年東京オリンピック・パラリンピックが開催される。オリンピックはスポーツの競技大会であると同時に、文化的プログラムでもある。東京大会について考える際に、このムーブメントがどのように歴史的・社会的に継承されてきたのか、そしてそこに東京、日本がどのような意義を新たに書き込めるのか、といった問いを立てることにとどまらず、オリンピックとはどのようなイベントであるのか、それを開催するということが東京という都市や日本に何をもたらすかという視点を付け加えることによって、この大会はより奥行きを持って論じられるだろう。

第4回目となる奈良女子大学・オリンピックシンポジウムは、1964年東京オリンピックに焦点をあてて議論する。この大会を経験した人びとからは、「あの感動の大会を再び」経験したいという声がよく聞かれる。そこには戦後復興を果たし、高度成長を経験した日本人の物語が単純に重ね合わされ、神話化されてはいないだろうか。64年大会後に生じた多くの問題が20年大会後の日本社会を先取りしていると考えれば、そこで生じた問題について、振り返っておくことは意義のあることだろう。

本シンポジウムでは、64年大会を可能にした歴史的・社会的文脈、すなわち高度成長という時代を視野に入れながら、戦後復興とオリンピックの開催という二つの要素から浮かび上がるナショナリズムの様相、そしてその成功神話が現代にもたらす影響について検討する。

アクセス

近鉄奈良駅1番出口より徒歩5分。
正門よりお入りください。
お車での来学はご遠慮ください。



シンポジスト／コーディネーター

内田隆三（東京大学名誉教授）

『現代社会と人間への問い』（編著、2015、せりか書房）
『ベースボールの夢』（2007、岩波書店）

阿部 潔（関西学院大学教授）

「東京オリンピック研究序説——『2020年の日本』の社会学」（2016、『関西学院大学社会学部紀要』123: 65-83）
『スポーツの魅力とメディアの誘惑——身体／国家のカルチュラル・スタディーズ』（2008、世界思想社）

石坂友司（奈良女子大学准教授）

「東京オリンピックと高度成長の時代」（2009、『年報・日本現代史』14: 143-85）
「国家戦略としての二つの東京オリンピック——国家のまなざしとスポーツの組織」（2004、清水論編『オリンピック・スタディーズ』せりか書房、108-22）

井上洋一（奈良女子大学教授）

「スポーツと人種をめぐるスポーツ権」（2016、日本スポーツ法学会監修『標準スポーツ法学テキスト』エイデル出版、55-7）
「スポーツと環境をめぐるスポーツ権」（2016、日本スポーツ法学会監修『標準スポーツ法学テキスト』エイデル出版、57-8）

お問い合わせ先

奈良女子大学スポーツ健康科学コース 石坂友司 E-mail: yishizaka@cc.nara-wu.ac.jp / TEL/FAX: 0742-20-3347